第25期第2回理事会議事録

日　時：昭和63年10月26日（水）　18時～20時
会　場：宮城県民会館（仙台市国分町 3-3-7）
出席者：浅井，岡村，河村，村上，木田，安田，中村，村松，菊地，吉田，武田，廣田，佐橋，爪生，元田，石島（オブザーバー　前田，安成）

議　題

報告事項

1. 第25期第1回常任理事会議事録は一部修正の上承認された．
2. 各委員会報告

〔庶務〕

資料に基づき報告があった．主なものは次のとおり．

ア　第25期役員改選結果を文部大臣に報告した．

イ　学会費などの請求はデータベースから払込通知票に記入する方式に改める．（本年度から実施の予定）

〔気象集誌〕

・1989年2月号から，紙面の改善，経費の軽減などを考慮して印刷方式を改めることについて資料に基づいて報告があった．

主なことは次のとおり．

ア　A4判，電子出版とする．

イ　FD投稿，編集が可能（論文のデータベース化の可能性）

・会員外の投稿の扱いについて規定を改め，ページチャージについても規定を設ける．

・校正を厳密に行うため，アルバイトのトレーニングをしている．

〔各賞〕

ア　日本気象学会奨励金受領候補者の投票結果と受領者が報告された．

受領者

大野木和敏　仙台管区気象台

銘苅　眞正・金城　勝重　南大東島地方気象台

橋本　雅巳　岡山大学付属福山中・高等学校

イ　第15回日産学術研究助成について，2件の申請があり次の2件を推薦した．

1）吉川　友章（気象研究所）ヒマラヤ高峰のテレメーターによる地球規模の気象と環境の測定と解析

2）高橋　　劭（九州大学）酸性雨の研究

ウ　第29回東レ科学研究助成について，4件の申請があったが推薦は1学会2件以内に限定されているので推薦委員会で選考の結果次の2件を推薦した．

1）権田　武彦（東京理科大学）光散乱法による雪結晶の成長機構の検討

2）高橋　　劭（九州大学）台風くずれのバンド雲からの豪雨機構

〔国際学術交流委員会〕

ア　国際学術交流基金について昭和63年10月15日現在の募金状況報告があった．目標額達成に向けて募金活動をもう暫く続けるが，収束の時期と運用について検討する．

イ　昭和63年度後半期の国際学術交流集会補助金交付について報告があった．

この期間の者は3名あったが，1名は募集の期間に条件が詳当しないので適用除外となり次の2件2名に補助金が交付されることになった．

・水野　　量（気象研究所）
WMO「雲物理・気象改変研究プログラムに関する第5回会議」（北京）

・万納寺信崇（気象庁数値予報課）
NCAR「局地モデルの国際比較の研究会」（ボールダー・アメリカ）

〔その他〕

「第14期気象学研究連絡委員会」の新しい委員の報告があった．

菊地勝弘	北海道大学	岡村　存	気象研究所
田中正之	東北大学	立平良三	気象庁
松野太郎	東京大学	武田喬男	名古屋大学
浅井冨雄	東京大学	廣田　勇	京都大学
川口貞男	国立極地研究所		

審議事項

1. 会員の新規加入：新規加入は5名，退会2名が承認された．
2. 昭和64年度事業計画案・予算案

第1次案が提示された．審議の結果，今後事業計画や予算などについて新しい企画があれば追加する

など検討し修正していくこととなった.

3. 藤原賞の規定変更について

第24期理事会からの引継事項である授賞者数を「1名」から「原則として1名」にすることが了承された. また, 同時に堀内基金奨励賞も「1名」から「原則として1名」にすることになり, 来年春の総会に提案することになった.

4. 堀内基金奨励賞候補者推薦委員会の委員について次の通り承認された.

担当理事	廣田　勇	京都大学
委　員	駒林　誠	気象庁
	田中　正之	東北大学
	深尾昌一郎	京都大学
	松野　太郎	東京大学
	山形　俊男	九州大学

5. AGU（アメリカ地球物理学連合会）日本開催の協力について

国内関連学会の相互連絡のための学会代表者連絡会議（12月6日）に, 総合計画担当の松野理事が出席し当面の対応をすることになった.

6. 第4回国際シンポジウム「都市気候・計画・建築」の主催団体として参加することについて, 承認された.（昭和64年11月6～11日, 東京）なお, 開催のための組織委員会構成には当学会から河村理事が参加する予定.

7. 極域委員会設立の提案について

研究会「南極圏の気象」の幹事の安成哲三会員（オブザーバーとして参加）から上記委員会を設立したいとの提案があり, 審議の結果, このような専門分科会の積極的な活動を支援して行くことになった.

但し, 学会の組織の中で位置づけについて今後常任理事会で検討することになった.

8. 研究会（講演会）のあり方について

講演企画担当の木田理事から, 事情説明があった. この問題は今後委員会で検討することになった.

編集後記：1988年も残り少なくなってきました. 今年は冬が早く訪れましたが, 12月号がお手許に届く頃には本格的な冬になっていることでしょう.

1年を振り返ってみると, 今年は気象現象が社会にいかに大きな影響を持つかを, 改めて身近に感じさせる年になりました. 今年春から初夏にかけての米国中西部の干ばつが, 穀物相場を暴騰させましたし, 7月～9月にかけての東日本太平洋側での低温, 日照不足, 多雨により農作物が大きな打撃を受け, ごく身近には八百屋の野菜の信じられないような高値を呼びました.

このような気象現象については, エル・ニーニョの逆の状態である「ラ・ニーニャ」の影響とか, 地球大気の湿暖化の現われとか, いろいろ推測されているようですが, 少なくとも対流圏の大気が, 上層の大気, 海洋, 人間の社会活動など, 様々の要素に左右されやすいものだということを（まだ, その実体は必ずしも明らかではないにしろ）再認識させることにもなったと思います. 現在, 上層大気とか, 海洋を組みこんだ大気大循環モデルがこういった現象の解明のために用いられています. しかし, フロンガスがオゾンを破壊している可能性があるなどと言われると, そのうち『世界経済の動向』を組みこんだ大循環モデルなどというものも必要になるのかもしれません.

今月号は, いかにも冬にふさわしい論文二題の他, はからずも, 海洋と大気との相互作用に関連した論文とWCPの窓が各1, 中層大気とオゾンに関するワークショップ報告とシンポジウム報告が各1という構成になり, 素顔 '88 まで掉尾を飾って『中層大気の女神』を登場させたのも, 新しい年の大気研究の一つの流れを暗示しているような気がします.

なお, 『天気』の誌面を充実させるために, アンケートを実施しています. 今年の『天気』を振り返って, あるいはこれまでに感じてきたことなど, この機会に記入して投函して下さい. 葉書は10月号の末尾に綴じ込んであります.

また会員の広場には誌上討論の提案を掲げています. 読んで面白い『天気』をつくってゆくためにも, 他の欄についても, 皆様の積極的な参加をお待ちしています.

新しい年の大気研究の一層の発展を祈ってペンを置きます.　（K）